

GTR Magazine

117 2014/Jul

特別付録

収録時間

「最速Rの称号」
スペシャルDVD

平成26年5月31日発行・発売(偶数月1日発行・発売) 通巻102号 第18巻 第4号 平成10年9月18日第3種郵便物認可 特別価格1500円

長く乗り続けるための

次期型R36に思いを馳せて

Rの足元を飾るに相応しい逸品

R's Meeting 2014 in 富士スピードウェイ



横浜ゴム PC製品企画部

萩原 修氏

「企画段階から5本スポークならではの躍動感とディープリムが製作のコンセプトでした。わたし自身、GT-R=5本スポークという思いが強いんです」とグループADライバーであった萩原氏は語る

THE YOKOHAMA RUBBER ADVAN Racing GT

7万8,440円(9J×18+25)~12万2,040円(12J×20+20)/本

妥協なきモノ作りが生んだ自信作

優れた機能美と高品質で、高い支持を得ている横浜ゴムのアルミホイール。デザインから開発までを一手に引き受けるのが同社の萩原 修氏だ。そのフラッグシップモデルである「アドバン・レーシングGT」は氏のGT-Rに対する拘りから生まれ、R35の質感をより高めてくれる。では、その拘りはどこから生まれたのか、萩原氏に尋ねてみた

文：竹内修介 写真：木村博道
 ◎ワイエフシー ☎03・3431・9981 <http://www.yokohamawheel.jp/>
 撮影協力：HKSテクニカルファクトリー ☎048・421・0508 <http://www.hks-tf.co.jp/>

最速のR35への装着により
実証されたホイールの性能

本誌116号でお伝えしたように、「HKSテクニカルファクトリー」のR35が、富士スピードウェイで「1分43秒221」というとてつもないタイムを叩き出した。これはラジアルタイヤによるR35の富士最速記録であり、今もこのタイムは破られていない。そのマシンに装着されているのが、マシニング&レーシングハイパーシルバーの「アドバン・レーシングGT」である。

アドバン・レーシングGTは5本スポークとディープリムが特徴的な立体感のある金型鍛造1ピースホイールだ。アルミホイールに要求される軽さや剛性、強度、そしてブレーキの冷却といった性能の高さを最速のタイムが証明している。まさにGT-Rのために生まれたようなこのホイールの仕掛け人は、「横浜ゴム」製品企画部 ホイール企画デザイナー チーフ・マーケティング・プランナーの萩原修氏である。

萩原氏は平成5(1993)年5月16日、スポーツランド菅生の表彰台の頂点で、シャンパンのコルクと悪戦苦闘していた。その年、HKSチームのドライバーとして羽根幸浩選手とともにグループA・GT-Rのステアリングを握った。第3戦、菅生ラウンドで初優勝を飾っている。その記念すべき表彰台で、鈴木利男選手のシャンパンが目に入り、結局コルクを抜くことができなかった。「当時憧れといえは星野一義選手が乗るカルソニック・スカイライン。HKSのGT-Rにもカルソニックと同じ星野インパルの5本スポークホイールが装着されていました。同じ土俵で同じホイールを装着して戦



ディープコーン形状の5本スポークディスク面が立体感を生み出し(写真上)、ディープリム構造がGT-Rならではのワイルドな雰囲気を出し出す(写真下)



最速R35“神風”が履くのはスポークステッカー仕様のマシニング&レーシングハイパーブラック(写真上)。プレミアムバージョンは3次元加工機による彫り込みロゴが特徴(写真下右)。セミグロスブラックに加えて今夏にレーシングゴールドが追加(写真下左)



HKSテクニカルファクトリー
菊池良雅代表

「デザイン、強度、剛性、軽さはもちろん、サイズバリエーションが絶妙なところも素晴らしいです。この春からは18インチシリーズも追加されたので第2世代GT-Rのオーナーさんにもお勧めですね」

5本スポークが譲れないGT-Rの定番



第2世代R向けの18インチはデザインを見直したことで、20インチのイメージを損なわない顔を実現した

つたあの中から、「GT-Rには5本スポーク!」という確固たるイメージが出来上がったんです」と萩原氏。ドライバーを引退して手掛けた「アドバン・レーシング」の5本スポークホイールは当然、歴代Rを視野に入れた開発がなされてきた。その最新モデルであるアドバン・レーシングGTは、最初から明確に20インチありきのR35用を目指したという。純正ホイールを除き、特定の車種をターゲットに開発されたホイールはあまり例を見ない。同社としても初の試みである。

視覚的効果だけでなく、ディープリムを採用するために、リバース構造になった。そのことによるメリットも生まれた。インナーリム側にタイヤを組み込む際の段付きが必要になり、これがリムの剛性を高める

効果がある。その結果、段付き部分を薄くでき、軽くもできた。ただし、軽さの追求だけではホイールは成立しない。「例えるなら高級な薄いワイングラスを想像してください。何かにぶつけた瞬間すぐに割れてしまいますよね。ホイールも同じで、軽さだけを追求するなら極限まで薄くすればいい。しかし、意図しない衝撃が加わったときに割れてしまいます。ですから、強度も確保するためにはある程度の肉厚が必要。しかもその厚さを均等にすることが要求されます。軽さと強さのバランスをいかに取るか、常にせめぎ合いなんです」

レース用ホイールのリムはシツカリとした作りのものが多く、軽さだけを追求していないことは一目瞭然。一見、フラットな路面を走るレースでは衝撃が少ないようにも思えるが、コースアウトした際でも確実にピットまで戻ってこられる強度も必要だ。ヤワなホイールでは無理。ドライバーとしてそれを強く感じていた。

「また、カッコ良く見えるようにするのもクルマの楽しみ方のひとつですね。ディラーオプションだけではつまらない」とも言う。横浜ゴムのリリクスするホイールは、そんな萩原氏の拘りから、ターゲットとするクルマが美しく見えるサイズをセレクト。海外ユーザーからも高く評価され、現在では同社ホイールの売上は全体の3割が海外だという。

アドバン・レーシングGTはオーナーの使うステージによってさまざまな組み合わせができるサイズバリエーション(20インチの場合、10、12、14、16、18、20インチ)も魅力。伝説のグループAドライバーの熱い想いが作ったホイールは、いまや国内だけでなく世界ブランドに成長した。